令和3年度　学校評価総括表　　伊丹市立東中学校

教育目標			自ら学び、未来を拓く力を育む　心豊かな生徒の育成					
重点目標			東中しぐさ（心）の確立　→　和文化と心の文化の融合					
項目		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校運営協議会
確かな学力の向上	基礎・基本の徹底 確かな学力の向上	①基礎的、基本的な知識・技能を習得する ②観点別の学習の成果を分析し、効果的な学力向上策を実施する	①各教科で観点別評価についての説明を行い、適切に評価することで学習意欲を高める。 ②弱点項目について、質問しやすい声掛けや環境づくりをする。	①学習の成果を適切に評価されているという回答が80%以上になる。 ②弱点項目の内容などに対する質問がしやすいという回答が65%以上になる。	B	「学習の成果について適切に評価してくれる」という項目については、生徒は去年に比べて2%減少して、92%となり、保護者は去年に比べて3%減少して、90%となったが、目標は達成できた。しかし「先生に質問しやすい」という項目については、去年に比べて3%減少し62%となり、目標を達成できなかった。今年度は評価方法が変わったため、教師も生徒も評価方法をしっかりと理解していく必要性がある。	「学習の成果を適切に評価してくれる」については、基礎・基本の徹底を行うために、小テストや課題、実技を行わせるなど、できていない箇所を丁寧に説明することを継続していきたい。また、問題等でできていないところを授業やテスト返却の際に、より意識して明確にしていく。さらに、シラバスを活用し、生徒・保護者に対して、各教科の評価方法について周知徹底を行っていく。 「先生に質問しにくい」については、質問しに来ることを待つのではなく、教師側から声をかけるなど質問しやすい雰囲気をつくる。	①現状でも充分対応いただけているが、更にこまめな声掛けを意識してほしい。 ②保護者アンケートで「取り組み成果を適切に評価している」の回答の「1」が昨年比11ポイント減が気になる。 ③「基礎・基本の徹底・確かな学力」の向上については、全国学テ・学調の結果をみると、かなり高いレベルにある。この機会を捉えて、授業のさらなる進化を期待する。質問しやすい雰囲気作りも教員の授業力のひとつとして、雰囲気作りや質問への対応スキルを磨いていただきたい。 ④教師と生徒の関係はとても良好である印象を受けた。生徒はよく集中し、授業内容も専門性が高く、熱心さがうかがえる。ただ授業のスタイルには大きな違いがあり、板書に計画性が見られない授業がある程度散見されることが気になった。
	学習習慣の定着 読書活動の推進	①家庭学習を充実させる ②朝読書を通して読書活動を充実させる	①1日2時間の家庭学習を達成させる ②全員が集中して10分間の朝読書を行うよう指導する。	①「家庭学習のための宿題が適切に出されている。」という回答が、保護者、生徒ともに80%以上になる。 ②朝読書の充実のため、図書委員会を活用して学級貸出を充実させ、図書館利用増加へつなげる。	B	①「家庭学習のための宿題が適切に出されている。」と回答している生徒は88%で、前年度より5ポイント上昇している。しかし、保護者は67%と前年度より低く、また教職員も76%と前年度より低くなっている。以上の点から生徒と保護者、教師との間で家庭学習に対する意識のズレが感じられる。 ②読書活動の推進では学校全体での朝読書の取り組み、図書便りを通じての図書館司書の働きかけから、学校の読書活動に肯定的な意見を持つ生徒・保護者は8割を超え、今年度も一定の成果をあげている。特に図書館の使いやすさと利用頻度について、場所の不利は相変わらず否めないものの、図書委員が中心となって図書館利用の呼びかけをした結果、クラス全体が協力して図書館を利用するようになったという例がある。こうした図書委員の活動が一定の効果をあげたと考えられる。	①家庭学習の充実ひいては基礎学力向上のため、東中生につけさせたい力を教科別、学年別で年度当初に検討し、計画的に課題を出す。さらに出した課題は必ず提出させ、活かす工夫も必要である。 ②朝読書については以後も継続して指導していく。読書活動推進のため、図書委員によるオススメ本の紹介や図書委員主体の図書館まつりの充実、図書館便りの活用など、東中図書館の情報を引き続き発信していく。	①コロナ等で長期欠席や学級閉鎖などの際にも今後も継続して課題を準備してほしい。 ②読書のよい機会ですので、継続してほしい。 ③現在、読解力に関して、新井紀子国立情報学研究所教授のRST（リーディングスキルテスト）が注目されている。西脇市では、その活用を研究しており、「基礎的読解力指導事例集」を作成している。東中でも検討されてはどうか。
	指導方法の工夫改善 言語活動の充実	①ICT機器を活用した授業改善を行う ②授業におけるグループワークなどの主体的・対話的な活動の実施	①タブレットや電子黒板、実物投影機等を活用した授業改善に努める。 ②各教科において1分間スピーチなど、生徒の発言の場を設定したり、グループワークやタブレットの活用した授業を実施する。	①全教員がICT機器を活用できるようにする。 ②生徒アンケートの回答において、「先生は教え方にいろいろ工夫している」、「授業はわかりやすく楽しい」の割合が85%になる。 ③グループワークの実施やタブレットの活用し生徒の考えを引き出す工夫に努める。	C	①教職員アンケートで「ICT機器の活用を含んだ教材研究を十分行い、「よく分かる授業づくり」を実践している」と回答した教職員では、昨年に比べると全体的には変化はないが、実践している教員が増え、全くしていないと回答した教員が0%であったことから教員のICTを使用するという意識が向上したと思われる。②「よくわかる授業づくり」では教師側も様々な工夫をしており、生徒にも伝わっているが、授業がわかりやすく楽しいと感じている生徒は約80%程度である。目標の85%にはまだ届いていないのが現状ではあるが、毎年増加傾向にあるので、達成していきたい。③教科によっては、グループワークを取り入れて生徒の考えを引き出す工夫をしている。	①授業改善のためのICT活用法についての研修及び教職員自身が自主的に研究を行う。②授業研究を行い、授業方法について検討した上で、教員間で、より授業研究ができるような公開授業を行う。③主体的・対話的な活動を通して生徒の言語活動の充実を図る。	①コロナ等で長期欠席や学級閉鎖などの際の活用方法を検討いただきたい。 ②ICTは、今後の授業改善のみならず、不登校生徒への対応や保護者とのコミュニケーション充実の可能性を持っている。全教員が気軽に使えるようになることをめざす。教育センターやICTの得意な若手教員のプロジェクトなどが活用方法のノウハウを開発し情報発信することが必要だと思う。 ③学習にタブレットを活用しているクラスが増えていた。
豊かな心と健やかな体の育成	不登校への対応	不登校生徒数を減少させる	不登校生徒を出さないための、伊丹市共通実践事項を実行する。学年の生徒指導の分掌の中で問題行動と不登校対応を分けることで教職員の負担を軽減する。	①不登校生徒数が前年比90%以下を目指す。 ②生徒アンケート7・8の項目、保護者アンケート5・6の項目について肯定的評価が80%以上になる。	C	①昨年12月の不登校の数は23名、今年は38名（昨年比165%）で目標は達成できていない。不登校の定義の変更が大きな要因であるが、連絡が取れていなかったり、会えない生徒はほとんどいない。 ②アンケート4項目中3項目が達成できていない。特に保護者アンケートの「お子さんのことで相談できる教職員がいる」は75%で一番低かった。	不登校生に対して、一人一人に合わせた対策を行い、各関係機関と連携を取りながら、段階的に集団生活に戻れる手立てを取る。 日頃から生徒への教育相談や保護者との連絡を積極的に行い、人間関係の構築や悩み事の早期発見と解決に努める。	①段階的にICTも取り入れてはいかがでしょうか。 ②不登校生徒に対する対応は、学校単位だけの取組みではしんどいと思う。市長部局の福祉や心理の専門家との連携が必要である。不登校対応が教師個人の責任にならないよう体制作りを整えていく必要があると思われる。 ③保護者が相談するときの候補先として、学校運営協議会やPTAへの相談窓口を周知されてはどうか。
	問題行動への対応	問題行動を起こさせない指導体制を確立する	「みそあじ」を徹底し、問題行動を未然に防ぐ。	「ルールやマナーを教えてもらっている」と回答する生徒が90%以上を維持する。	A	「ルールやマナーについてしっかり教えてもらっている」という項目に肯定的な回答をした生徒・保護者が95%を越えており、「学校は自分を大切にすることや、他人への思いやりについて教えてもらっている」という項目に肯定的な回答をした生徒・保護者は85%を上回った。年々少しずつ生徒・保護者による評価が高くなっている。	「みそあじ」を徹底すると共に、生徒一人一人に対するきめ細やかな指導を心掛けることを継続する。また、教職員も子供たちの手本として、「みそあじ」に対する意識を高め、実践・指導していきたい。さらに、学年内や学校内で連携を図り、組織的かつ迅速に対応できるような体制をつくる。	①「みそあじ」の徹底により、生徒指導に対する取り組みはうまくいっていると思う。今後は、生徒会活動などの充実により、校則の見直しなども含め「開発的な生徒指導」の比重を多くすることも検討願いたい。 ②「みそあじ」や「無言清掃」といった、学校文化の醸成に力を入れている成果が出ていると思われる。
	道徳教育の推進	①豊かな心を育てる道徳教育の充実をはかる の向上をはかる。 ②無言清掃を通して「五つの心」を育てる	①担任だけでなく全教員の道徳教育の実践力 ②5つの心を意識した教材を扱う場面を設定する	①「自他を大切にすることを教えてもらっている」と回答する生徒、保護者を80%以上にする。 ②各学年ごとに、オープンスクールで公開授業を行う。	A	生徒、保護者ともにアンケートの「自他を大切にすることを教えてもらっている」という項目が昨年度よりも数値が上がった。授業力向上のためにローテーション授業の取り組みができた。しかし、フィードバックの仕方に課題が残った。	ローテーション授業では、今後も継続して資料や指導案を検討する時間を確保する。ローテーション授業の後に、授業の振り返りをする機会を設け、全体で共有する。また、授業力向上のために校内研修をさらに充実させる。	道徳のローテーション授業は、教科別の中学校における教員の授業研究の共有化の有力な手段だと思う。今後も取り組みを継続してほしい。
	健やかな体づくりの推進	①健康管理の啓発を行う ②健全な食習慣の推進をはかる	①欠席調査を行うことで、感染症の拡大防止に努める。 ②ほけんだよりを通して、健康管理や健全な食習慣の啓発に努める。 ③保健委員会を中心に健康管理の啓発と食習慣の意識を高め、自己の健康管理を行う。	①感染症の集団感染防止対策を、年間を通して行う。 ②ほけんだよりを月1回以上発行する。 ③保健委員会を中心に、給食に関する整備やマナー等、食育の意識を高める。また、保健委員会と連携することで、生徒自身で感染症予防を意識をした行動をとれるようにする。	B	①新型コロナウイルス感染症感染拡大に伴い、手洗い・うがい等の啓発や、教室の換気を行う取り組みを強化した。②ほけんだよりを毎月発行し、ホームページに掲載することで健康管理の啓発に努めた。③保健委員会をとの連携を強化することで、給食や感染予防についてクラスへ啓発することができた。④栄養教諭と連携することで、食に対する取り組みや食物アレルギー対策に尽力した。⑤給食の残食等の課題があったため、喫食時間を延ばしたことで残食を減らすことができた。来年度も、生徒や教職員とも食の充実を図り、その意識を高めることに努める。	①感染症予防対策 ・感染症の意識を高めることが、規則正しい生活習慣につながるので、引き続きほけんだよりや保健委員会とも連携を図り啓発に努める。 ・登校前の健康観察を忘れる生徒が後を絶たないなど、新型コロナウイルス感染症予防対策がおろそかになっている。そこで、行事やほけんだよりを通して、さらなる啓発に努めると同時に、保健委員への指導を強化し、クラス内での予防に対する意識を高めるように取り組む。 ②給食配膳時の事故予防 靴紐がほどけたまま食缶を取りに行ったり、運搬時に躓いたり、おかずでやけどをしたり、食器が割れケガをしたりと小さい事故が見受けられる。このような場面があったときには、職員朝礼や保健委員会で報告し、生徒や教職員の事故予防の意識を高めたい。 ③学校保健委員会等を活用し、栄養教諭との連携をさらに進めることで、食に関する取り組みを強化していきたい。	校舎内、特に廊下の物が少なくなり、清潔な環境を整えている印象を受けた。こうしたことが事故防止や安全な環境に繋がると思われるので、継続して取り組んでほしい。
信頼される開かれた学校づくり	学校情報の積極的な発信	積極的に学校情報を地域、保護者、生徒に発信する	①学校だよりを毎月発行する。 ②学校ホームページを月10件以上更新し、学校情報を積極的に発信する。 ③「しっとこ！東中」を有効的に活用する。 ④ミマモルメを用いて積極的に情報を発信する。	①学校だよりを毎月発行する。 ②学校のホームページを月10件以上更新する。 ③保護者アンケートにおいて、「学校は保護者や地域の願いに応えている」「学校は学校・学年便りやミマモルメ、ホームページ等を通じて学校や子どもの様子などをわかりやすく伝えている」の回答が90%以上になる。	B	学校だよりを毎月発行し、ホームページも頻繁に更新することができた。ミマモルメを積極的に活用し、丁寧に情報発信することができた。保護者アンケートの「学校は学校・学年便りやミマモルメ、ホームページ等を通じて学校や子どもの様子などをわかりやすく伝えている」という項目では、肯定的な意見が90%であり、目標を達成できた。ただし「学校は保護者や地域の願いに応えている」については82%であり、改善を要する。	家庭訪問や保護者連絡などを小まめにすることで、保護者の願いに応えることができるようにしていく。学校運営協議会やファミリーサポーターズで出た意見をくみとり、地域の願いを踏まえた教育活動の向上に努める。	コロナが落ち着いて、早く参観やオープンスクールが行えるようになって欲しい。定期的にオンラインでの参観など取り入れてみてはどうか。
	学校運営への市民参画の推進	東中ファミリーサポーターズ・PTAとの連携強化をはかる	「サタスタ東」や「図書活動」「スマイル活動」などへの協力を生徒・PTA・地域に呼びかける。	①毎週土曜日の「サタスタ東」の開催 ②ボランティアスタッフの登録を呼びかけている。 ③保護者アンケートで「学校はサタスタ東や図書活動などの取り組みを通して、地域や保護者との連携のもと積極的な教育活動を行っている」と回答した割合が80%以上になる。	B	①については、今年度登録生徒数は42名で、昨年に引き続き、コロナ禍の影響で生徒たちの参加が減少した。 ②については、ファミリーサポーターズ全体でのスタッフ数は減少している。 ③については、肯定的な回答は93%と目標値を大きく超えている。	①登録人数の目標枠は定めないが、生徒・保護者に対して、引き続き参加を募る。 ②登録人数の目標枠は定めないが、メール配信等を利用した広報活動を行う。 ③引き続き、学校が地域や保護者との連携のもと,積極的な取り組みを行っていることを周知する。	①PTAとしてもwithコロナでの学校との連携方法を検討していきたい。サタスタ東やボランティア活動がコロナの影響で、十分に実施できないのは残念だが、参加を募る活動は継続していただきたい。 ②地域人材の活用や開かれた学校作りという点では模範的な取り組みが成されているという印象を受けた。
	安心な学校づくり	生徒・教職員・保護者の危機管理意識の向上を図る	①学期に1回避難訓練及び安全教育を行う。 ②教職員による登下校指導の充実を図る。 ③全校集会等で「施設・設備の安全な使用方法」の説明等を行う。 ④交通安全や事故防止等に関わる資料を生徒・保護者に配付する。	当該項目における生徒・保護者・教職員の肯定的意見を今後も85%以上にする。	A	生徒アンケートの肯定的意見は2項目とも85%以上である。また、教職員アンケートの肯定的意見も2項目平均が87%となっている。保護者アンケートの「学校は交通事故や事故防止のために生徒の安全に関する適切な指導を行っている」の項目の肯定的意見は83%であった。今年度は新型コロナウイルスの影響がありながらも避難訓練や研修などを実施することができた。特に避難訓練や防災教育等を通じて、生徒の危機管理意識を向上させた。「交通事故や事故防止」のための指導を警察の協力のもと行い、生徒には勿論のこと、保護者にもその内容を伝えることができた。加えて、救急対応においても、消防署の協力で行った研修で教職員の更なる意識の向上に取り組むことができた。	①学期に1回避難訓練及び安全教育を行う。 ②教職員による登下校指導の充実を図る。 ③全校集会等で「施設・設備の安全な使用方法」の説明等を行う。 ④交通安全や事故防止等に関わる取り組みを生徒・保護者に情報発信する。 検討事項 家庭環境調査票か緊急連絡票の中に「避難場所」の項目を新たに設け、保護者と生徒が防災に対する意識を高めるきっかけとする。	校内での安全を確保するために「ヒヤリハット運動」なども検討されてはどうか。

各学校で特に取り組みたい課題	キャリア教育の推進	①3年間を見通したキャリア教育を推進する ②小中高連携を推進する（コロナの状況に応じて） ③ボランティア活動を実施する（コロナ状況に応じて）	①キャリア学習ノートを活用した進路指導を行う。 ②小中合同の行事を行う。オープンハイスクールへの参加を呼びかける。 ③東中地域活性隊、夏休みの清掃活動を呼びかける。（コロナの状況に応じて）	①計画的にキャリア学習ノートを活用する。 ②小中の十分な交流をはかる。（コロナ状況に応じて） ③生徒の「学校は、ボランティア活動を勧めている」・保護者の「学校は、ボランティア活動を生徒に勧めている」の学校評価アンケートの肯定的意見を80％以上にする。	C	進路についての意識は、3年生は相変わらず高いが、1，2年生の意識の低さが課題となった。コロナ禍の状況もあり学校側も積極的にボランティア活動を勧めることができなかった。進路については、生徒の発達段階に応じた情報提供をしていく必要がある。またボランティア活動についてもコロナ禍の中でできないと決めつけるのではなく、できるものを学校側がもう少し智恵を絞る必要がある。	キャリアパスポートを活用した振り返りなどをおこない、進路について考える時間を増やすと共に、1年生では、地域の高等学校紹介、2年生では、入試制度についてなど段階的な情報提供が必要である。トライやるウィークと上手く関連づけていきたい。またその活動を学年通信などで保護者にも伝わるようにする。 ボランティア活動は校内でのボランティア活動ができる機会を増やす。また道徳などでボランティアの目的などについて話す機会を増やし、生徒の意識を向上させる。	①将来のことも大切だが、「今」や「今やりたいこと」も大事にしたうえで将来を見据えてほしい。ボランティア活動を学校から勧めることはとても大切だと思うが、教室にごみが落ちていたら拾うとか、小さなことでも人の役に立てることはあると思うのでそんなこともイメージさせてほしい。 ②PTA・地域とのつながりを強めていってもらいたい。ボランティア活動も、生徒の心を育てる重要な教育活動である。 ③生徒会を中心にして、校内ボランティア、校外ボランティアの活動の充実に向けた取り組みを期待する。 ④進路についての情報も可能な範囲で共有していけると小学校としても指導の方向性に役立てることが出来ると考えている。
	特別支援教育の推進	①個別の指導計画を作成する ②校内委員会を開催する	①教科担当・支援員・特別支援学級担任・及び介助員の意見を校内委員会に上げ、協議し職員へ周知する。 ②校内委員会は時間割に組み込み、原則週一回実施する。また、必要に応じて随時ケース会議を開く。	①生徒アンケート18「先生は、一人ひとりの状況に応じたきめ細やかな指導をしている」及び教師アンケート25「個別の指導計画に基づき、生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導をしている」のポイントが上がる。 ②職員用アンケートで「校内委員会の内容に基づき、コーディネーター、支援員の連携がはかられている」の肯定的回答が90％以上になる。	A	昨年度に引き続き教師アンケート26「校内委員会の内容に基づき、コーディネーター、支援員との連携が図られている」の肯定的回答が90％を上回った。定期的に校内委員会を実施した成果であると考える。一方で、①生徒アンケート18「先生は、一人ひとりの状況に応じたきめ細やかな指導をしている」及び教師アンケート25「個別の指導計画に基づき、生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導をしている」のポイントが下がっており、個別のニーズに応じたきめ細やかな指導という点に課題が見られる。	・特別支援や合理的配慮についての共通理解を進めていくための研修を取り入れる。 ・特別支援的対応や合理的配慮の校内での事例の記録を蓄積し、学年会議や職員会議の場を活用して共通理解を図る。 ・校内委員会の定期的な開催を継続し、学年問わず目前の特別支援の課題に対して対応できるようにしていく。 ・個別の指導計画を作成し、職員への周知を行う。	本校の保護者の中にも中学校での特別支援教育のあり方について早い段階で知りたいと感じている方が一定数いる。可能な範囲での情報共有を進めることが出来ればと考えている。
	子どもたちの一人ひとりの個性や能力に応じた教育の推進	①Q－Uを活用したバランスのとれた集団づくりを行う。 ②学級・学年でのリーダー育成を行う ③礼儀と規律ある部活動の推進をはかる	①年2回Q－Uを実施し、学級の現状を把握する。② リーダー研修会や専門委員会を定期的に行う。 ③定期的に部活動集会を実施する。	①②③生徒アンケート「学校は学校行事に取り組めるように教えてくれている」の94%は現状維持し、「部活を通して礼儀や規律について教えてもらっている」の回答は90%を超えるように、「先生は，一人ひとりの状況に応じきめ細やかな指導をしている」に回答する数値が80%以上になる。	B	前年度と同様に年2回Q-Uを実施し、学年で分析し共有できたが、全教員が活用できていない。新型コロナウイルスの影響で、行事が例年と変化したり、部活動集会ができなかったりしたことで、これまでは自然と淘汰されていたリーダーを育成しにくくなっている。それにもかかわらず、昨年度と変わらず高い値で現状維持した項目や数値が上昇したものも見られた。引き続き、個別で声をかけたり、クラス内での呼びかけを続けていく必要がある。課題に関しては前述のとおりQUの結果の把握と、よりきめ細かな指導のための時間の確保である。	カウンセリング対象生徒を中心に、担任・副担任問わず、教科担任含めて向き合う時間を増やしたり関わり方の工夫をする。 生徒自身が主体的により良い学校づくりができるよう、専門委員会の運営方法や、グレードアップ週間の内容について、生徒会が中心となって考えるとともに、生徒会役員の活動の見える化できる機会をつくる。 また、個々の生徒に関わる時間を作り、ひとり一人に役割を与えたり、責任感を持てる役割を増やしていく。生徒のひとり一人が活躍できる教育の推進を図る。	Q－Uの結果の「要支援レベル」の生徒を中心に、さらに、きめ細かい指導を期待している。
	安全で快適な学校園施設の整備	①無言清掃を徹底する ②教育機器の管理を行う ③教育施設・設備の整備を行う	①時間内での清掃を徹底して行う。 ②備品の点検を徹底し、正しく使用させる。 ③定期的な点検と、授業での活用機会を設ける。	①「学校が生活の場として、清潔で美しく整っている」の回答が80％以上になる。 ②③「学校は、学習の場として子どもが活動しやすい環境が整っている」の回答が90％になる。	B	学校は「施設、設備の安全で正しい使い方等を教えてくれている」、「生活の場として、清潔で美しく整っている」、「清掃活動や環境美化に力を入れている」、「学習の場として子どもが活動しやすい環境が整っている」への肯定的な回答が約90％に達しており、教育環境に対する評価は高い。 「図書室は使いやすく、よく利用している」については、否定的な意見が引き続き70％を上回っている。図書室は、教室から場所が遠く、3年間でほとんど利用しなかった生徒もいる。	教育施設・設備については、定期的な点検や使い方の指導を徹底し、引き続き良い環境が保てるように取り組んでいく。 図書室については、訪れる回数が増やせるように、授業で活用するなど、使用する機会を設ける。	無言清掃も東中の伝統になりつつあります。先進県の長野県などの事例を参考にして、より進化させていただければと思う。

学校運営協議会評価総括	知・徳・体のバランスのとれた生徒の育成を図り、地域・保護者・生徒に愛される開かれた学校づくりを目指していく。
次年度に向けた重点的な改善点	不登校生徒へのきめ細やかな対応、さらなる学力向上への工夫、「文武両道」を軸とした生徒の健全な育成を図っていく。

自己評価の基準　**A**：目標を上回った　**B**：目標どおりに達成できた　**C**：目標をやや下回った　**D**：目標を大きく下回った